における神以外のいかなる方でもありたまわないから、善についての問いはただキリストのうちにのみ、その答えを見出しうるのである[5]」。

ボンヘッファーにとって、キリスト教倫理の課題は、人間が善くなるというようなことではなく、「キリストにおける神の啓示の現実性が、神の被造物の中に現実化することであり、それはちょうど教義学の問題が、キリストにおける神の啓示の現実性の真理であるのと同様である[6]」と主張されるのである。

したがって他の一般の倫理が、当為と存在、理念と実現、動機と結果の対立という特徴を持つのに対し、キリスト教倫理においては、それは現実とその実現、過去と現実、歴史と出来事（信仰）との間の関係、あるいはイエス・キリストと聖霊との間の関係が問題とされるのであり、ボンヘッファーの倫理はキリスト中心的であると言える。受肉と受難と復活のキリストとの出会いの中に、キリスト教倫理はその源を持っているのである。

キリストは受肉者であるゆえに人間であるべきだということは、人間の権利であり責任である。受肉が「この世界を、神の前で現実性を持っている世界[7]」にするのである。イエス・キリストは超人になるようにという求めを拒否し、真実な人間であることに固執されたのである。

キリストは受難者であるゆえにキリストの形になるということは、神によって罪の宣告を受けた人間になるということである。その日常生活において、人間は神による死の宣告を身に負うのであり、罪のゆえに神の前に死なねばならないのである。

キリストは復活者であるゆえにキリストの形になるということは、神の前に新しい人間になるということである。キリストの復活を通して罪と死は克服され、新しい創造が始まるのである。イエス・キリストは生ける主であり、キリストには天においても地においても、すべての力が与えられたのである。

したがってボンヘッファーは、死のただ中において人間は生命をもっており、罪のただ中において正しい者とされ、古きもののただ中において新しい人間であると言うのである。キリストが生きたもうゆえに人間は生き、キリストにあってのみ生きるのである。しかしこの人間の新しい生は、「キリストと共に神の内に隠されている[8]」のである。新しい人間は、この世界の中で、ほかの人間と同じように生きる。彼はほかの人間と区別されることはほとんどない。また自分を目立たせようとはせず、ただ彼の兄弟たちのために、キリストを目立たせようとするのである。

このキリスト中心的観点に立って、ボンヘッファーは、キリスト教倫理の課題は理想と現実の間の離反の克服に乗り出すことではなく、現実の中にしっかりと身をおいて、神の身体的な戒めを明らかにすることなのだと主張するのである。

四、ボンヘッファーの『倫理学』の中心的命題について

ボンヘッファーは、何よりもこの現実の世界の中でキリストの意味を問い、キリスト者として如何に生きるかを追究した神学者であったと言えるであろう。この時代を生きるわれわれにとってキリストは誰であるのか、という問いが、彼の生涯を貫いた問いであった。そして彼の生きた時代には、ナチスが支配するドイツがあり、世界大戦を戦う時代があった。彼は現実における神の現在を基礎にその倫理を考えようとするのであるが、その現実は決して理想的なものではなく、善と悪が共存し、罪に満ちた現実であった。[9]

この中でボンヘッファーは、独自な試みを企てており、それは彼の倫理の中心的命題を形成していると言えるであろう。

第一に、彼の四つの委任の教理を取上げることにする。ボンヘッファーはこのように主張する。

5) Ibid., S. 200–202.
6) Ibid., S. 202.
7) Ibid., S. 315.
8) コロサイの信徒への手紙 3 章 3 節参照。
9) A. Dumas : Dietrich Bonhoeffer, Theologian of Reality を参照。